



## コロナ禍において移民生徒の学びを再構築

**研究代表者：徳永 智子（筑波大学人間系）**

共同研究者：海老原 周子（一般社団法人 kuriya 代表理事）

渡邊 慎也（特定非営利活動法人 NPO 法人カタリバ・パートナー）

Joshi Ratala Dinesh Prasad（東京大学大学院総合文化研究科）

### 1) 研究期間

短期集中型（2020年5月～10月）

### 2) 応募時の目的・目標・達成イメージなど

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、世界各国で学習権の保障や教育機会へのアクセスに課題があることが明らかになりつつも、十分な対策が取られているとはいえない状況です。特に社会経済的に弱い立場に立つ移民生徒への影響が大きいという調査結果があります。日本国内でも、外国人高校生は、情報へのアクセスの難しさ、日本語を含めた学習機会の乏しさ、家族の失業・休業による生活困窮、メンタルヘルスの問題などが顕在化しており、外国人生徒の多様なニーズに早急に対応することが必要です。わたしたちは、コロナ禍により外国人高校生にどのような影響があったか、若者参加型アクションリサーチ（Youth Participatory Action Research: YPAR）の方法を用いて当事者である外国人の若者と共に実態調査を行い、学業・生活・進路等への影響を明らかにします。そして、明らかになったニーズをもとに、実際に外国人高校生に向けてオンラインの教育支援を行います。

### 3) 本プログラムで実施した研究の内容と成果

私たちは、若者参加型アクションリサーチ（Youth Participatory Action Research: YPAR）のアプローチから、新型コロナウイルス感染拡大の状況のなかで外国人高校生・専門学校生が生活・学業・進路選択においてどのような困難を抱え、どのようにそれら乗り越えているのかについてオンライン・インタビューを行いました。また、NPOカタリバと連携して外国人高校生向けのオンライン・イベントを企画・実施し、調査から明らかになった知見をもとに、生徒に応援メッセージを届け、エンパワメントを目指しました。

私たちの研究の特徴の1つは、YPARのアプローチを用いていることです。YPARとは、若者を研究のコラボレーターとして捉え、研究のすべてのプロセスにおいて対等な立場で関わり、共に知識を生み出し、その知識を活かし状況改善や社会変革につなげていくアプローチです（Cammarota & Fine, 2008）。本プロジェクトでは、YPARの理念をもとに、都内の定時制高校を卒業し、現在大学生でインドにルーツをもつアルジュンさんと専門学校に在籍するフィリピンルーツのパオロさんと共に研究を進めました。研究チームは、この2人のユースリサーチャー以外に、外国人高校生の支援を行っている一般社団法人 kuriya 代表理事の海老原周子さん、NPOカタリバ・パートナーの渡邊慎也さん、東京大学大学院総合文化研究科に所属し、在日ネパール人の子ども

もの教育の研究を行うジョシ・ディネスさん、そして移民の教育を研究する徳永智子（筑波大学人間系）で構成されています。コアメンバーを中心に毎週オンラインミーティングを行い、YPAR におけるリサーチの意味や目的の確認、研究の問いの設定、インタビューの質問項目の作成、インタビューの実施、ふりかえり・分析、アクションプランの作成・実施の過程を経ました。ユースリサーチャーがコロナ禍でどのような経験をし、どのような気づきがあったのかなど、彼らの豊かな経験や視点に基づき研究を展開していきました。

#### YPAR オンラインミーティングの様子



(左から右へ) 上段：徳永、渡邊さん、ジョシさん  
下段：パオロさん、アルジュンさん

オンライン・インタビューは、ユースリサーチャーが主導して、都内の定時制高校に在籍する高校生および都内の専門学校に通う若者計 10 名（ルーツ：フィリピン、ミャンマー、ネパール、オーストラリア）に実施しました。インタビューからは、自粛期間中に若者たちが健康、生活、学業、進路など様々な面で困難を抱えていることが明らかになりました。アルバイトがなくなり（あるいはシフトが減り）、経済的に厳しい状況に置かれた若者もいれば、緊急事態宣言下でホテルや飲食店、コンビニなどでの仕事を継続しており、感染への不安や学業と仕事の両立などから、多くのストレスを抱えている若者もいました。また、言語的・文化的障壁から、休校期間中、学校からの情報が十分に届かず、学校とのコミュニケーションや課題の実施に困難を抱えている生徒も多くいました。他にも、緊急事態宣言下で在留資格が更新できなかったり、家族や親戚が暮らす母国との往來ができなくなったりすることから不安を感じている若者もいました。

このように様々な困難がありながらも、私たちがインタビューを通して気づいたことは、若者たちが SNS やメディアを通じて国内外のニュースを多言語で幅広く収集したり、母国の友人や親戚とコミュニケーションをとったり、家でも楽しめる趣味や遊びを生み出したり（絵を描く、作詞・作曲、楽器演奏、料理、オンラインゲーム、写真撮影、映画鑑賞など）、家族との時間を楽しんだりする姿でした。コロナ危機の中でも困難を乗り越えるべく、クリエイティブなアイデアや方法を創出していました。さらに、家族とのつながりの重要性に気づいたり、コロナをきっかけに世界で起きている自然災害や人身売買、格差、人種差別などの問題への関心が高まったり、人々の協力や連帯の重要性を認識したりするなど、コロナ禍で様々な気づきや学びがあったようです。日本語や英語、タガログ語、ネパール語などを用い、SNS を駆使して国内外の情報にアクセスしたり、海



外にいる友人や家族・親戚と交流したりするなかで、コロナの感染拡大の状況、行政の介入や支援のあり方、市民の意識や行動の仕方などについて、日本と海外を比較しながら、自身の経験や立ち位置をふりかえっていました。

本プロジェクトでは、オンライン・インタビューや高校生向けのオンライン・イベントの実施、都内の定時制高校のシティズンシップ授業での当該プロジェクトの発表や高校生のメンタリングなど、様々な形でアクションをとりました。ここで重要な役割を果たしたのは、当事者のユースリサーチャーです。リサーチャーとしてのリーダーシップを発揮しながら、他の高校生や専門学校生の「声」に耳を傾け、彼ら・彼女らに寄り添い、仲間との対話を通して意味づけを深めていくプロセスがありました。インタビューに協力してくれた若者だけでなく、ユースリサーチャーも研究プロジェクトを通して自己肯定感を高めていく様子が見られました。NPOカタリバと連携して実施した Zoom を使用したオンライン・イベントでは、以前日本に暮らしていた生徒もフィリピンから参加し、国境を越えて若者がつながるプラットフォームとなりました。前半はカタリバ主導でゲーム要素を取り入れた高校生の交流を行い、後半はネパール人留学生のジョシさんのファシリテートのもと、高校生のストーリーテリングを行い、最後にユースリサーチャーから高校生に向けて、コロナ禍の応援メッセージが届けられました。

今後は、本プロジェクトの知見をもとに、ウェブサイトを作成し、複数のセミナーや学会などを通して、国内外の研究者・実践者、行政、学校関係者、外国人家族・若者などに向けて、発信を試みていく予定です。

#### 4) 研究業績・研究広報

特になし

#### 5) 最新の成果・情報

筑波大学「知」活用プログラムウェブサイト>徳永 智子

[https://www.osi.tsukuba.ac.jp/fight\\_covid19/tokunaga/](https://www.osi.tsukuba.ac.jp/fight_covid19/tokunaga/)

#### インタビュー記事

[https://www.osi.tsukuba.ac.jp/fight\\_covid19\\_interview/tokunaga/](https://www.osi.tsukuba.ac.jp/fight_covid19_interview/tokunaga/)